

## マタイによる福音書5章3節 「心貧しき者」

### 1A まことの幸い

- 1B 全ての弟子たち
- 2B 全ての特徴
- 3B 新生による性質
- 4B 信者と不信者との違い

### 2A 天の御国

- 1B 霊的な国
- 2B 今も臨む国

### 3A 心の貧しさ

- 1B 心にある貧しさ
- 2B 御国を妨げる高ぶり
- 3B 「貧しさ」の意味しないもの
  - 1C 新しい律法
  - 2C 個性
- 4B 「貧しさ」の意味するもの
  - 1C 聖なる神を仰ぎ見る者
  - 2C 自分への圧倒的な絶望

## 本文

マタイによる福音書5章3節を見てみましょう、「**心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。**」

### 1A まことの幸い

イエス様は、ガリラヤで福音を語られました。多くの病を治されて、悪霊を追い出されました。そのような窮地の中にいる人々のところに行き、神の国の実体そのものを体験できるようにしてくださいました。そのように良き行いをされることによって、大勢の人々が付いて来ました。その中でも、弟子たちがいます。弟子とは、ユダヤ教の中で、自分の生活の中で師を仰ぐことのできる人を見つけ、その人の教えについて行く人々です。イエス様は、そうした弟子たちをご自分の近くに引き寄せて、山の上で座りながら、教えられました。

その初めの言葉は、「**幸いです**」というものでした。これは、人間にとって普遍的な渴望ではないでしょうか？すべての人が幸福を切望しています。けれども、その幸福を手に入れることが出来ずに悩んでいます。しかしイエス様は、「**幸いです**」と言われました。そして、まことの幸福への道をは

っきりと示してくださっています。日本語でも「最高に幸せ」とか、「至福の時」とか言う満足感がありますね。そういった幸せです。聖書でも、その最高の至福、深い安息を言い表す言葉があります。「詩篇 1:1-2 幸いなことよ 悪しき者のはかりごとに歩まず罪人の道に立たず嘲る者の座に着かない人。【主】のおしえを喜びとし昼も夜もそのおしえを口ずさむ人。」「32:1 幸いなことよ その背きを赦され罪をおおわれた人は。」外にある幸いではなく、内なる幸いです。内なる変革であり、神の中における変革です。

### 1B 全ての弟子たち

そして、この「幸い」という言葉を、イエス様は八回、繰り返されます。今日学ぶ、3 節に限らず、その八つの性質に関わる「幸い」の全てについて共通していることを話したいと思います。一つは、「これは、特別な人だけに与えられているのではない」ということです。イエス様は、弟子たちをご自分のところに引き寄せて語られました。その弟子とは、すべての弟子です。私たちすべてのキリスト者に対して、イエス様は語られています。私たちは、心のどこかで「これらのイエス様の約束は、私には当てはまらない。山上の垂訓で言われているようなことは、特別な人、神の領域に到達できたような人だから実現するのだ。」と言って、自分をその約束から切り離す傾向があります。カトリックなどでは、「聖人」という言葉を使って明らかに区別させていますが、聖書によれば、神に召された者は全て、聖なる者、聖徒になっています。けれども、その特定の基準に到達できるからこそ、イエス様の幸いにあずかれると思って、教会の中で特定の立場に付けば、充足を得られると思いがちです。いいえ、幸いは全ての弟子たちに、恵みによってイエス様は与えてくださいます。

### 2B 全ての特徴

第二に、これらの八つの性質は、すべて一人のキリスト者に与えられるものです。キリスト者であれば与えられる神の性質であり、順を追って与えられるものです。「心が貧しい」からこそ、「悲しみ」、悲しむからこそ、柔和であり、柔和だからこそ、義に飢え渴き、そして憐れみ、心を清くし、平和を造り、そして義のために迫害されます。それぞれ、神の御霊の中で与えられる特徴であり、いわゆる聖霊によって与えられる賜物としての能力のことはありません。ある人は悲しんでいるけれども、他の人は義に飢え渴いている、というものではありません。また、ある性質があれば、他の性質がないというものではありません。憐れみ深いために、心は清くなれないということはありません。義に飢え渴いているから、平和を造れないということでも、絶対にありません。もし、そのように見えるのであれば、それは自分の捉え方が不十分だからであり、特徴ですから強弱はあっても、全ての性質が存在しています。

### 3B 新生による性質

そして第三に、これらの特徴は全て「御霊によって、新しく生まれたことによって初めて得ることのできるもの」だということです。「悲しむ」「柔和」「憐れむ」「平和を造る」など、一般にも普通に使われているものです。そうであれば、生まれつきの人間の性質の中にも見出されるものだと勘違

いてしまいます。表向きは、一般の柔和さや優しさがある人がいれば、それが柔和であると思っ  
てしまいます。そういった性格だから、ということで、一般的に優しい性格の人であれば、そうい  
った人がよりクリスチャンらしくなれて、気の強い人であれば、クリスチャンとして生きるのは難しいと  
いうことになってしまいます。いいえ、そういったものでは全くありません。そこで、これから学ぶ、  
「心の貧しさ」というところにある幸いを理解する必要が絶対にあります。全く次元の違うことを、イ  
エス様は語っておられます。

#### 4B 信者と不信者との違い

ですから、山上の垂訓の初めに来る、この八つの幸いは、「キリスト者と不信者との決定的な分  
岐点」と呼んだらよいでしょう。御霊によって生まれた者と、そうでない者との違いと言ってもいいで  
す。パウロが言った、「だれでもキリストのうちになるなら、その人は新しく造られた者です。古い者  
は過ぎ去りました。見よ、すべてが新しくなりました。(2コリント 5:17)」世においても、表面的にイ  
エス様の言葉のつまみ食いはできるでしょう。つまり、文脈を外れて、イエス様が語られた意図か  
ら外れて勝手に使っているから使えるのであって、そのまま受け入れていければ、到底、この世  
界では受け入れられるものではありません。

「心豊かにされる者は幸いです」と言われたら、誰もが頷くでしょうが、「心貧しき者は幸いです」  
など言えるでしょうか？ここからして、気が狂っていると思えません。そして「悲しんでいる者は  
幸いです」です。「笑っているのが幸い」でしょう？そして、「自己実現することが幸い」と教えられま  
すが、けれども、自分の可能性を捨てるような「柔和な者は幸いです」とイエス様は教えています。  
すべてが、「これは絶対に当たり前の価値観」とされているものを、片っ端から否定されているので  
す。最後の、「義のために迫害される者は幸いです。」は、究極ですね。全く世においてはそんな  
幸せはありません。けれども、そういったものがあって、それで「平和を造る者は幸いです」という  
言葉もあります。平和を造ろうとしても、心貧しきということをしなければ、そこには争いが必ず起  
るということをイエス様は教えている訳です。この正反対に思えるような話しを理解できるのは、神  
の御霊によって、根底から全く新しく生まれること、変えられることが必要なのです。

#### 2A 天の御国

そして、「**天の御国はその人たちのものだからです。**」と言われました。八福の初めに、天の御国  
に入る道を教え、そして最後にも、「**天の御国はその人たちのものだからです**」とあります。そして、  
報いが大きいとイエス様が言われました。心の貧しさによって御国に入り、義のための迫害によっ  
て御国において報いがあります。これらの幸いは、全て天の御国におけるものなのです。

#### 1B 霊的な国

ここで、「天の御国」ということについて、いくつかの誤解を書きます。一つは、「死んでから行くこ  
ろ」ということだけで捉えることです。イエス様は、天の御国の話をされている時に、少なくともこ

この文脈では、そのことについて語っておられません。「死んでから存在するもの」ではないのです。もちろん、死んでからの状態も含まれるでしょう。しかし、ここでは、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」とイエス様が言われました。「近づいている」と言われているのです。ここで、みなさんがその場で死んで天国に入るのだよ、ということ言われていないのです。むしろ、「今、神の支配が迫ってきている」ということです。「国」とは、「主権者がいて、その支配が広がっている状態」を指します。サタン力が広がっているならば、そこはサタンの国です。自分の世界が広がっているなら、そこは自分を王とする国です。ですから、今、イエスご自身がおられます。この方が主権者、王であられ、この方に服する時に、そこがまさに天の御国になります。

イエス様は、敢えて「天の御国」と言われていますが、彼らは地上にいるのですから、地上に臨む神の国に他なりません。けれども、なぜ「天」と言われているのか？聖書では、「天」は「神の御座があるところ」ということです。この物理的な天地が過ぎ去っても、なおのこと残り、永らえるのが天です。神ご自身が住まわれるところが天であり、その国のことを話しているのだと、物理的なところと切り離しておられます。なぜかと言えば、当時のユダヤ人が地上のことに傾いて、神の国というものが政治的なこと、軍事的なことに変わってしまったからです。ユダヤ人は、ローマに納税するのが屈辱的だと感じていました。また、ローマはエルサレムの神殿にも事があれば干渉してきて、彼らの異教、多神教を押し付けようとする感じていました。そういった異教の国がユダヤ人を虐げているところから、解放してくれるのがメシアであり、神の国の到来だと考えていました。

けれども、神の国というのは、絶えず、天におられる父なる神からの霊的な恵みがあって、初めて成り立ちます。本質的なところは霊であり、目で見えるものは一時的なものです。イエス様は、ピラトの前でこう言われました。「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったことでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。(ヨハネ 18:36)」これは、他人事、ユダヤ人たちだけの事とすることはできません。私たちも、神の国をいつの間にか、目に見えることへのこだわりによって、目に見えるものだけに引き下げてしまう傾向があります。そして、本質的ではないところで命をかけて戦ってしまいます。けれども、この世にあるものは世に任せ、神のものを神に捧げるという態度が必要です。そこで、神の国だけでなく、天の御国とされています。

## 2B 今も臨む国

私たちは将来に、イエス様が戻って来られて神の国が地上に立てられることを強く願っています。山上の垂訓の中の、「御国が来ますように」というのは主に、イエス様が戻ってきてくださいということです。ですから、それを待ち望んでいます。それを待ち望む中で、御国の中にある霊的な祝福が、今、私たちに注がれます。御国はこれから到来しますが、それでも霊的には今、既に到来しているのです。ですから、私たちがイエス様を自分たちの主としてあがめ、信じ、仕えているところに、イエス様の支配が広がり、そして御国がそこには来ているのです。パウロが言いました、「神

の国は・・聖霊による義と平和と喜びだからです。(ローマ 14:17)」

### 3A 心の貧しさ

#### 1B 心にある貧しさ

では、今日の箇所を中心的な内容である、「心の貧しい者」をじっくり見て行きましょう。先ほども申し上げたように、ここには福音の根本、というか、始まりが書かれています。この「貧しい」という言葉は、乞食の事を指しています。ギリシア語には、いわゆる私たちが使う「貧しい」という言葉もあります。つまり、生活保護を受けているか、またしっかり働けば抜け出せるような貧しさです。けれども、ここで使われている「貧しい」は、全く何も持たない状態、つまり絶対的な乞食状態です。しかも、この「心」は正確なのは「霊」です。つまり、「霊的に乞食になった者は、最高に幸せなのです。」とイエス様は言われているのです。

言い換えれば、「神に満たされるためには、自分が空っぽになっていなければならない。」ということなのです。満たされるためには、空になる必要がありますね。自分という存在がなくなるということではありません。自分の心にある自我と言ったらよいでしょうか、自分に対する誇りが全て打ち砕かれている状態です。主がイザヤによって語ったことが、この状態に当てはまるでしょう。「わたしは、高く聖なる所に住み、砕かれた人、へりくだった人とともに住む。へりくだった人たちの霊を生かし、砕かれた人たちの心を生かすためである。(イザヤ 57:15)」自分が建て直されるためには、神に建て直していただくには、初めに自分というものが倒されるのだということです。

多くの人が、ここを霊的なことではなく、貧しいという状況だけのこととして捉えています。つまり、「貧しい状況であれば、それが幸いだ」という見方です。ルカによる福音書には、「貧しい人たちは幸いです。(6:20)」ともあります。けれども、そこにおいても貧しい経済状況ということではなく、その貧しさの中で神を見ることができるといふ、霊的な状態を話しています。ダビデが詩篇の中でこう祈りました。「40:17 私は苦しむ者貧しい者です。主が私を顧みてくださいますように。あなたは私の助け私を救い出す方。わが神よ遅れないでください。」彼はここで貧しい者という言葉を自分に当てはめていますが、経済的な苦境のことではなく、敵に追われている中で自分に救う力が内という無力感を言い表しています。ですから、物質的なこと、外見の貧しさではないのです。貧しくとも、神を求めず、富を求めているならば、貧しい者ということではありません。霊の乞食ということです。むしろ、自分が貧しいとか、弱い状況にあること梃子にして、実際はプライドを隠す道具にしているのであれば、それは心が肥え太っているということになります。

#### 2B 御国を妨げる高ぶり

山上の垂訓は、単にここでイエス様が特別な道徳訓を述べているのではなく、創世記から黙示録までの神のご計画全体に貫かれている御国の姿を言い表しています。その中で、神の国に入るのに必要なのが、「心の貧しさ」です。ですから、御国にとって最大の敵は、キリストが王となるこ

とを妨げるプライド、高ぶりです。「箴言 8:13 【主】を恐れることは悪を憎むこと。わたしは高ぶりとおごりと、悪の道と、ねじれごとを言う口を憎む。」主は悪として筆頭に挙げているのが、高ぶりです。自分の心に居座っている自分です。神によって砕かれていない心です。これが、もっとも天の御国を妨げています。

### 3B 「貧しさ」の意味しないもの

#### 1C 新しい律法

したがって、私たちが山上の垂訓を読む時に、モーセの律法に代わる新たな律法のように読んでしまったら、本末転倒になります。心の貧しい者は幸いです、という言葉を読んで、「ああ、私は心を貧しくしないといけない。」と思ったら、全く心の貧しさについて理解していません。その他、「これこれを行なったら、私は幸せになれる」と自分が行くことであるかのように、自己実現のように考えたら、山上の垂訓自体の意味を損じます。キリスト者の生活の中で、教会の生活の中で、「これこれをする事によって、安息を得たい」という行ないに基づいた考えを持っていたら、その時は「私」というものが主語になっており、「キリスト」が主語になっていないので、天の御国ではなく、自分の王国が広がることになります。

私たちは、世の中に生きています。ですから、絶えず、信者と不信者の間には全く調和しないことを知らないといけません。世における価値観の影響があるならば、それを捨て、警戒しなければいけません。キリストに仕えていると言いながら、実は自分のしたいことにすり替えられていないか？自分に死ぬと言いながら、実は自分の隠れた願いを成し遂げたいと思っていないか？自分を憎むと言いながら、実は自分自身を愛しているだけではないのか？自己実現、自己愛、自己憐憫など、あらゆる形で私たちに、新たな律法主義が忍び込みます。

#### 2C 個性

しかし、「心の貧しさ」というものを、まるで個性を殺すかのように考えたら、それも大きな間違いです。自分に死ななければいけない、というものを、臆病になったり、神経質になる、びくびくすることであるとしたら、それは見当違いです。自分の個性を人為的に弄ることが、自分に死ぬことではないのです。このことによって、しばしばクリスチャンが自分の性格や人格をいじろうとして、心を病むことさえあります。気をつけなければいけません。

神の恵みの中に生きる時に、その人の心は貧しくされています。その恵みの中に生きている時に、その人の個性はそのまま残っています。ペテロを見てください、彼の個性や性格は聖霊によって満たされた後も、その前も同じでした。天からふろしきが降りて来る幻を見て、「主よ、私は今まで、汚れたものを食べたことはありません。」と言いましたが、その直情的な性格は全然変わっていません。けれども、彼はもはや、漁に行き、その職業に自身を持ち、それゆえ弟子となつてからも、「私は、死ぬまであなたに付いて行きます。」というような自信に満ちた人ではありませんでした。

足なえの人に、「イエスの名によって、立ち上がりなさい」と大胆に言ったように、自分ではなく、イエスの名に確信を持っていました。拙速な性格は変わっていませんが、心が既に砕かれていて、主が語られる時に、それでもへりくだって聞き従っていくペテロに変えられていたのです。

心の貧しさが、そういった表面的な性格や人格の操作をしたところで、自分の高ぶりやうぬぼれが消えるのでは決してありません。いかにも謙遜であるかようにふるまうのですが、それが表向きであり、演じていることがばれてしまいます。自分を他の人に、自分がいかに心貧しきものであるかを立証しようとしてしまいます。普通にしていれば、御霊が導いてくださるのです。その中に留まるときに、へりくだりが必要です。そして、立証や認知は、神がしてくさるのであり、人々にも、聖霊によって証しされます。徹頭徹尾、イエス様がしてくさること、聖霊が導いてくださるのです。

#### 4B 「貧しさ」の意味するもの

##### 1C 聖なる神を仰ぎ見る者

真実な心の貧しさは、どのように来るのでしょうか？それを知るには、人間が普通に行なっていることを知る必要があります。自分の存在の価値観を、他の人との比較で行なっているからです。自分がどれだけできているのか？を他の人たちと比べています。彼よりは清いとか、彼よりは賢いとか、「自分はそこそこできている。」とか思っています。他者と比較することがいかに賢いことでないかをパウロは、コリント第二で話しましたが、イエス様はそれはパリサイ人のすることだとして、ルカ 18 章の中で話しました。「11 パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。12 私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。』」取税人と比較しているのです。

しかし、真実な心の貧しさは、神と比べる時に与えられます。聖なる神を仰ぎ見る時に、自分に圧倒的な無力感、どうしようもない罪深さ、自分で何かをしよう、何かができるとかいう、すべてがなくなってしまう。ただ神の憐れみにすがると願うしか残りません。ルカ 18 章を続けて読むと、取税人の祈りが出てきます。「13 一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』14 あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」パリサイ人が、自分の義を取税人と比べていましたが、取税人はパリサイ人と比べるのではなく、ただ神に対してのみ祈って、それであわれんでくださいと祈っています。その信仰が、彼にとって正しいとみなされた、義と認められました。

##### 2C 自分への圧倒的な絶望

聖書の中に、人間的に見れば、非の打ちどころのないように見える神の人が出てきます。例えば、ダニエルです。ダニエル書を読んでいて、彼が目に見える形で悪いことをしたこと、欠けたもの

があることは何も見えてきません。預言者エゼキエルを通して、ノアとヨブにならんで、義人の一人として数えられています。それは決して彼を完璧な人にすることはありません。けれども、その彼が、「私はもうだめだ」と自分の心の貧しさに気づいたことがあります。主の栄光、主の使いの栄光を見たときです。「ダニ 10:5-8 私は目を上げた。見ると、そこに一人の人がいて、亜麻布の衣をまとい、腰にウファズの金の帯を締めていた。そのからだは緑柱石のようで、顔は稲妻のよう、目は燃えるたいまつのものであった。また、腕と足は磨き上げた青銅のようで、彼の語る声は群衆の声のものであった。…私は一人残ってこの大きな幻を見た。内からは力が抜け、顔の輝きも一変して、力も保てなくなった。」聖なる神のお姿を見る、神に出会うことによって、ここに書かれているように、圧倒的に自分の無力感、自分が腐ってしまうような体験をしたのです。

ヨブはどうでしょうか？神ご自身が、彼は正しい人だとサタンに対して太鼓判を押しておられたのです。息子、娘が取られ、財産も取られても、それでも彼は主をほめたたえました。ところが皮膚にサタンが触れました。彼は耐え難い痛みとかゆみを覚えました。友人三人が寄り添ったものの、苦々しい言い争いへと発展してしまいました。ヨブの主張は、「あなたがたが主張しているように、私がこのような災いを受けるに値する悪を行っていない。私は無罪だ。」というものです。このようにして自分の正しさを主張していましたが、主なる神が嵐の中に現れました。そして、天地がどのように造られたのか、また動物がどうしてこのような行動を取っているのか？神が問い詰めました。ヨブは、「私は罪を犯しました」と一度言うのですが、それが心からのものではなく、反応しているにしか過ぎないことを知っておられたので、続けて語られたのです。制御しがたい生き物レビヤタンについては、どうなのか？問い詰めました。ついにヨブは、このように告白したのです。「42:4-6 あなたは言われます。「さあ、聞け。わたしが語る。わたしがあなたに尋ねる。わたしに示せ」と。私はあなたのことを耳で聞いていました。しかし今、私の目があなたを見ました。それで、私は自分を蔑み、悔いています。ちりと灰の中で。」彼は、神を見たのです。その問いかけの中で、神の栄光が見えたのです。そして自分がいかに罪深い者かが見えました。それで、自分を蔑み、悔いたのです。ここには、小手先の心の思いや性格の操作はありません。ただ、神の前で真正面から、ありのままの自分のままで悔いていました。

私たちが、他と比べて見ている自分と、イエス様が見ておられる自分とはこのように大きな格差があります。ラオディキアの教会に対して、イエス様が言われました。「3:17-18 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっている。わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買い、あなたの裸の恥をあらわにしないために着る白い衣を買い、目が見えるようになるために目に塗る目薬を買いなさい。」このように、自分がイエス様の目から貧しい者であることを知り、そしてすべて良きものは、買うという言葉、つまりイエス様からの恵みを受け取り、受け入れることだけなのだということです。

このようなに心を貧しくさせられた者たちが、聖書の中には数多く出てきます。アブラハムは、「18:27 ご覧ください。私はちりや灰にすぎませんが、あえて、わが主に申し上げます。」と言いました。ヤコブも、言いました。「32:10 私は、あなたがこのしもべに与えてくださった、すべての恵みとまことを受けるに値しない者です。私は一本の杖しか持たないで、このヨルダン川を渡りましたが、今は、二つの宿営を持つまでになりました。」バプテスマのヨハネも、「私には、その方の履き物を脱がせて差し上げる資格もありません。(マタイ 3:11)」と言いました。放蕩息子は、「15:19 もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。」と言いました。資格はどこから来ますか？そう、主から来ます。

そして、このように心貧しくされている者には、天の御国が来ています。「幸いです」最高の至福を味わえます。天の御国が近づいている、のではなく、「**天の御国はその人たちのもの**」となっているのです。もう自分の所有、自分の相続となっているのです。ですから、自分を見て、「自分を変えなければいけない」と思っている自分自身がいるとき、まだ御国の入口にも立っていません。それは、まだ自分自身に何かができるという信頼があるからです。心貧しくされてください。心貧しくされるのは、唯一、神の恵みの中に入ることです。聖なる神の姿の中にあずかることです。神がキリストによってしてくださったことを信じることです。そうすれば聖霊が働いてくださり、栄光から栄光へとキリストの似姿に変えてくださるのです。「2コリント 3:18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」